

## 一つの反「文明の衝突」論

佐藤 誠 (立命館大学教授)

ハンチントンの「文明の衝突」が『フォーリン・アフェアーズ』に発表されてから10年になる。「文明の衝突」論批判はすでに多くの論者によってなされた。東アジア一つをとっても、中国の道教や韓国のキリスト教を無視して儒教文明に一括りする乱暴さ。日本を独自文明にし朝鮮はしない御都合主義、等々、専門家でなくとも気付くことだ。結局のところ、米国の経済のライバル（であった？）日本、資源への脅威としてのイスラムへの異質論を振り撒きつつ、実は国内における非西欧的マイノリティー増大の幻影に苦しむエリート悲鳴だったのか。

それよりもハンチントンの次の見方はどうだろう。今後の世界は7つ、あるいは8つの主要な文明の相互関係によって規定されていくが、それらは西欧、儒教、日本、イスラム、ヒンズー、スラブ・オーソドックス、ラテン・アメリカ「そしてアフリカ文明も可能である」。3年後の単行本版でもハンチントンはアフリカ文明に「存在すると考えた場合」という条件をつけている。つまり、アフリカ文明はハンチントンにいわば半人前扱いされたわけである。この問題に触れた議論は、管見のかぎり、ないように思う。

文明論におけるアフリカのままっ子扱いはこれが初めてではない。梅棹忠夫は「文明の生態史観」で、「新世界についてはかんがえがまとまらない」という理由から考察の対象地域をアジア、ヨーロッパ、北アフリカに限定した。梅棹を受け継いだ川勝平太は「文明の海洋史観」で梅棹モデルの改良を試みたが、海洋を加えた以外、対象地域は基本的に梅棹を踏襲している。つまり、もっともオリジナルな文明論である梅棹理論、川勝理論は著しくユーラシア中心的呢なのである。

アフリカを学ぶ者の一つの課題がここにあると言えないだろうか。アフリカが世界文明の交流と対立の枠組みの中に適切に位置付けられていないことは、アフリカの武力紛争といえど安易にアフリカ独自の「部族対立」と決めつける風潮をももたらす。オゾン層破壊、温暖化、種の絶滅、環境ホルモンと、ますます破滅共同体的様相を呈する地球人類において、希求すべきは異文化・異文明間の相互排除ではなく共生にあるのならば、文明の衝突論ではなくアフリカを組み込んだ文明論の再構築が求められているのではないか。